

# 近代産業の発展—和歌山の工業化の原動力となった綿<sup>めん</sup>ネル業—

日本では、日清戦争前後から繊維産業を中心とする産業革命が進展しました。このころ和歌山では、綿<sup>めん</sup>ネル（紀州ネル）の製造業が主要産業に成長し、多くの関連産業の発展を促しました。綿ネル生地の見本帳から、和歌山発祥の綿ネルの歴史をたどります。

## 1 資料

【資料】綿ネル生地の見本帳（部分）



[\\* 資料全体のデジタル画像を見る](#)



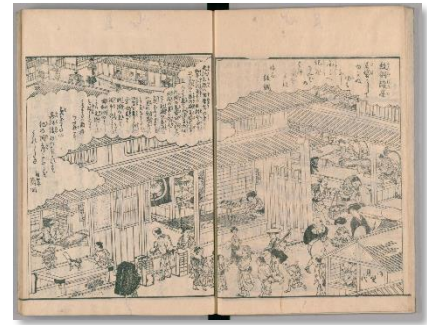
## 2 解説

### (1) 綿ネル(紀州ネル)の誕生

江戸時代、和歌山城下や周辺の各郡では、厚手の綿織物を松葉や針などで起毛した「紋羽織」が特産品として作られ、防寒用の衣料や足袋の裏地などに用いられていました。

明治初年、和歌山藩は藩政改革の一つとして兵制改革<sup>1</sup>を行い、近代的な軍服を必要としました。これをきっかけに、伝統の紋羽織を改良して新たに考案されたのが、当初「毛出し木綿」とよばれた綿ネルです。

綿ネルは、薄手の綿織物を起毛させた生地で、丈夫で軽く、やわらかな感触と暖かさが特徴です。輸入品のフランネル(毛織物)に似ていたことから綿フランネル(綿ネル・紀州ネル)と呼ばれました。和歌山の綿ネルは、兵士の肌着用生地として政府の軍隊に採用されて生産を拡大しました。1885(明治18)年前後には、京都や大阪府南部の泉州、愛媛県今治地方<sup>2</sup>などに製造技術が伝わり、各地で綿ネルの生産が始まりました。



『紀伊国名所図会』に描かれた紋羽織屋  
(国立国会図書館デジタルコレクションより転載)

### (2) 綿ネル業の発展と「南海の工業地」和歌山

綿ネルは、1880年代後半にはミカン・木材を抜いて県下第1位の産品となり、全国の生産高の50%以上を県内で占めました。

日清戦争後には、製造工程の機械化が進み、和歌山市とその周辺には、紡績業・織布業・捺染業・起毛業などの綿ネル生産にかかわるさまざまな工場が集積しました<sup>3</sup>。さらに、機械製造業や化学工業などの産業も発展し、第一次世界大戦の頃には、和歌山市は「南海の工業地」と称されるほどになりました。

また、綿ネル生産から転向した業者によって始められたメリヤス(ニット)やパイル織物などの繊維産業は、現在でも和歌山県を代表する地場産業の一つとなっています。



第一綿ネル株式会社(明治末期、和歌山市)  
(『第12回京摂区実業大会記念写真帖』より転載)

### (3) 本資料について

本資料は、綿ネル生地の見本帳です。資料が残されていた山裾織布場<sup>4</sup>は、1885(明治18)年に創業した綿布及び綿ネル製造業者で、名草郡三田村坂田(現和歌山市坂田)にありました。

表紙には「綿ネール見本」と記され、内側に9枚の綿ネル生地が貼り付けられています。この綿ネル生地は、日清戦争後から生産が急増した、いわゆる「捺染ネル」<sup>4</sup>と呼ばれるものです。捺染ネルとは、白地の綿布に化学染料を用いて色彩豊かな柄や模様をプリントした後、蒸気力を用いた機械で起毛を施したものです。明治・大正・昭和前期において和歌山県の主要産業となり、多くの関連産業の発展を促した綿ネルを今に伝える資料です。

<sup>1</sup> 和歌山藩では、1869(明治2)年にプロイセン(ドイツ)人のカール・ケッペンを軍事顧問として招き、全国に先がけて「交代兵」制度と呼ばれる徴兵制を実施するなど、近代的な洋式軍隊の創設をめざしました。

<sup>2</sup> 和歌山から技術が伝わった愛媛県今治地方は、綿ネルの一大産地となりました。1894(明治27)年には、今治の綿ネル業者が綿ネルの製造機械を改造してタオルの生産を始めました。これが現在の今治タオル産業につながっています。

<sup>3</sup> 和歌山市内では、1889(明治22)年に和歌山紡績会社、1894(明治27)年に和歌山織布株式会社が操業を開始し、綿ネルの原料となる綿糸や綿布などを生産しました。

<sup>4</sup> 明治初期の綿ネルは白や無地のものが主流でした。1883(明治16)年頃、あらかじめ染色した糸で織った綿布に起毛する「織込ネル」と呼ばれる柄模様の綿ネル生地が登場し、日清戦争後は「捺染ネル」が主流となりました。

### 3 活用のポイント

- 歴史の授業で近代産業の発展（産業革命）について学ぶ場面で活用できます。
- 日本の産業革命は、日清戦争前後に紡績業などの繊維産業を中心に進展しました。教科書や資料集では、和歌山県の近代産業について取り上げられることはほとんどありません。しかし、本資料を活用することで、和歌山県内でも産業革命がおり、当時全国第1位の生産高を誇った綿ネル業（繊維産業）が発展したことに気づかせることができます。
- 綿ネルは、現在の和歌山県内ではほとんど生産されておらず、児童・生徒にとって馴染みが薄いかもしれません。しかし、現在でもネルシャツやパジャマ、ベビー用品などの生地として広く利用されていることを紹介することで、身近に感じやすくなると思います。
- 導入資料として提示するほか、綿ネルと現在の和歌山県の地場産業との関わりについて調べる活動なども可能です。

### 4 出典

- ・当館所蔵「山裾織布場文書」整理番号 34 「綿ネル見本」  
※文書群の詳細については、[「山裾織布場文書目録 解題」\(PDF\)](#) をご覧ください。

### 5 関連資料・ウェブサイト等

- ・[『紀伊国名所図会（一之巻下）』\(国立国会図書館デジタルコレクション\)](#)  
…江戸時代の和歌山城下の紋羽織屋のようすが描かれている。
- ・[『和歌山大観』\(国立国会図書館デジタルコレクション\)](#)  
…1915(大正4)年に発行された和歌山市の商工業の概況等についてまとめた本。綿ネルについての記述もある。
- ・[「公文書にみる発明のチカラー明治期の産業技術と発明家たちー\(紀州フランネルの発明\)」\(国立公文書館HP\)](#)
- ・[「150年前のコア技術\(綿ネルの創成\)」\(和歌山県工業技術センターHP\)](#)

### 6 参考文献

- ・和歌山県史編さん委員会編『和歌山県史 近現代1』和歌山県、1989年
- ・和歌山市史編纂委員会編『和歌山市史 第3巻』和歌山市、1990年
- ・吉田昇三・安藤精一・殿井一郎『和歌山県繊維産業史』和歌山県繊維工業振興対策協議会、1977年
- ・安藤精一「創世期の和歌山綿ネル業」(安藤精一編『和歌山の研究 第3巻 近世・近代篇』清文堂、1978年)
- ・高嶋雅明『企業勃興と地域経済ー和歌山地域の検証』清文堂、2004年